市史の窓 No.37

車塚古墳の調査

車塚古墳に濠があったことが確かめられたのは今回の調査（昭和五十年十一月～五十一年三月）がはじめてです。これにより、この古墳は小山のような墳丘と、さらに大きな濠をめぐらす大王クラスに匹敵するものであることが分かりました。

約千五百年前、大和から東西に至る水陸交通の要所である平川の地に、京都府下でも最大クラスの人工の丘（古墳）が出現しました。今とちがってさえぎるものの少ない広大な南山城一帯に、この王のシンボルはひときわそびえ、権威を印象づけたことでしょう。

今、車塚と呼ばれるこの古墳は近鉄久津川駅東約三百メートルにある、高さ十二メートル、長さ百五十六メートルの丘です。

この度、この車塚の周囲一部で濠跡と考えられる地点を調査しました。最初は掘れども掘れども黄色い粘土ばかりです。四メートルも掘り下げた地点で人頭大の石が明らかに人工的にしきつめられているのを発見し、そこが濠の底だと確認されました。

ここで分かったことは、幅約二十メートル深さが四メートルの大きな濠があったということ。又、この四メートルの大きな濠を、こまかい粘土を沈でんさせ、埋めつくした水の流れがあったと推定されます。濠の底に並んでいた石は古墳全体をおおっていた石の一部と考えられますが、この石を鑑定してもらったところ、宇治川水系から運んだものだろうという結論が出ました。

古墳全体の石の量となると、膨大なものが予想されますが、どうして運んだことでしょうか。おそらくは舟で、宇治川から今は干拓でなくなった柜椋池をへて古川をさかのぼってやってきたことでしょう。

巨大な古墳を見るにつけ、私達は、この築造にたずさわった人々の労役を思わずにおられません。また、この古墳の主の運命も激しい中央の政権争いの中で、もまれ続けたことでしょう。

ところで、車塚は、千五百年前の歴史のみならず、近代の出来事をも伝えてくれます。古墳の頂上付近の大穴は、明治二十七年、今の国鉄奈良線を作る時、土取りのために削られたものです。また、第二次大戦中、飛行機の格納庫がわりに使われた大穴もあります。一方、考古学の世界では、大正四年、日本で、初めてといわれる古墳の科学的調査が実施されたことでも有名です。私たちは、地元平川の人々によって、この古墳が大切に守られてきた伝統を、今後さらに引きついでいかねばなりません。